

Casa Di Quartiere Alessandria アレッサンドリアの地区の家

空き工場を改修して開かれた、社会的包摂の場

【キーワード】

〔施設種別〕 ☐ 高齢者施設 ☐ 障がい者施設 ☐ 子ども施設 ☐ 住宅（住宅型ホテル） ■ 地区の家、他
〔運営主体〕 ☐ 市区町村 ☐ 法人 ☐ NPO ☐ 個人 ■ 社会的協同組合
〔建物形式〕 ■ 1 棟単体型（分散） ☐ 複数棟集合型 ☐ 団地型 ☐ 集落
〔建物状況〕 ☐ 新築 ☐ 増築 ■ 改修 ☐ 一部改修 ☐ 既存
〔対象者〕 ☐ 高齢者 ☐ 障がい者 ☐ 子ども ☐ ファミリー ■ 多世代 ■ 移民



入り口付近から見た地区の家

アレッサンドリアの旧市街の中心部に立地する。2010 年に民間倉庫を借り受け、1 年の準備期間を経て Casa Di Quartiere Alessandria が 2011 年に開設した。誰もが無料で使うことができるミーティングスペース、体育館、ジム、カフェ、倉庫を設け多様な活動を行っている。2016 年には向かいの空き工場を借り受け、コワーキング、工房などを行う PORTO IDEE を開設した。

視察月日 11 月 5 日

記録担当者 松原茂樹、佐藤栄治

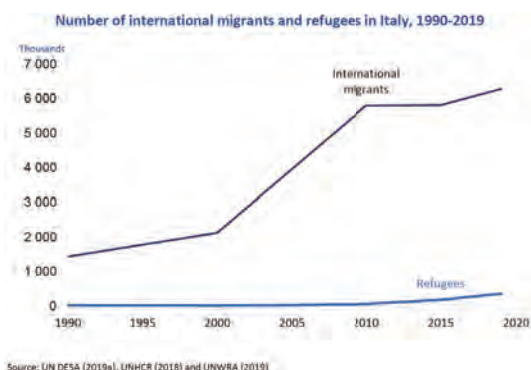
案内者 ファビオ・スカルトウリッティ氏（社会的協同組合 Associazione Comunità San Benedetto al Porto、アレッサンドリア支部の代表）

フェデリコ・マルコ氏（21 歳、大学生で、協会活動に加わって実習中）

多木陽介氏（通訳）

1. アレッサンドリア市の現状

アレッサンドリアをはじめ、イタリア全体で移民人口が増えている^{注1)}。イタリア全体での移民数は、1990 年には 1428.2 千人であったが、2000 年には 2121.7 千人、2019 年には 6273.7 千人と増加し、2019 年にはイタリアの総人口の 10.4% を占めるに至っている。また難民も増加し、2010 年には 56.4 千人だったが、2015 年には 177.2 千人、2019 年の統計では 354.7 千人と総移民人口のうち 5.7% を占めている。



Source: UN DESA (2019a), UNHCR (2018) and UNWRA (2019)

図1 イタリアの移民・難民人口の推移

注1) <<https://www.un.org/en/development/desa/population/migration/data/estimates2/countryprofiles.asp>>

注2) DELIBERAZIONE DEL CONSIGLIO COMUNALE DELIBERAZIONE N. 61 / 182 / 278 / 1410M

注 3) Associazione Comunità San Benedetto al Porto (サン・ベネディット・アル・ポルト コミュニティ協会), <<http://sanbeneditto.org>>



写真1 アソシエーションの旗(右)



写真2 壁に貼られた Don GALLO 神父の写真・イラストとファビオ氏



写真3 地区の家(左)と PORTO IDEE(右)



写真4 地区の家の外観

アレッサンドリアはトリノから列車で1時間ほどの位置にある都市であり、基礎自治体としての周辺集落を含む人口は2017年6月30日時点で94,185人である。他の自治体と同様に長引く不況に直面しており、アレッサンドリア市議会^{注2)}は2012年には財政難を決議した^{注2)}。

2. 地区の家「Casa Di Quartiere Alessandria」の立ち上がりの経緯

ファビオ・スカルトウリッティ氏はアレッサンドリア出身であり、ジェノヴァを本拠地として活動する^{注3)}に所属している。ファビオ氏は、このアソシエーションの代表である Don Andrea GALLO 神父(1928-2013)と20年ほどともに活動をしており、神父から指示を受けてアレッサンドリアでのソーシャル活動を行い始めた(写真2)。母体である Associazione Comunità San Benedetto al Porto は約50年前に Don GALLO 神父が始めたアソシエーションで、ホームレスや移民、暴力を受けた人、人身売買の被害者など弱い立場の人の生活を支援する活動を行っている。マザーハウスはジェノヴァにあり、ミラノ、ヴェローナ、アレッサンドリアに活動拠点を構えている。なお、ファビオ氏が現在代表を務めている。Don GALLO 神父は、自らを Prete da marciapiedi (路傍の司祭) と称し、所有物はベッド一つだけというほど清貧を貫いた社会的活動家として知られ、誰からも慕われていた(写真1)。権威に大して従順な人間を育てるファシズムに反対し、レジスタンスとして活動した経験は、彼の「批判的精神」を育てたという。共同体活動での神父の教えは、共同体みんなのしあわせを考え、どんな町でもそこにいる人の繋がりを創ることである。そのためにどんな人とも話し、またどんな人の話も聞かすが、まずいちばん弱い立場の人の話を聞くことを大切にしていた。

ファビオ氏がアレッサンドリアで活動を始めたとき、活動の拠点として、使っていないパブリックスペースを使わせて欲しいと行政に伝えたが、そのときはちょうど

ファビオ氏がアソシエーション全体の代表であるということを資料から確認できませんでした。アレッサンドリア支部のことであれば、そのように書きたいですが・

空き物件がなかったため断念した。その後も私有地を探し求めたが家賃が高く、最終的に2010年に現在の旧民間倉庫を見つけ、家賃1500ユーロ/月で借りている。ここは旧市街地の真ん中であり、間口も広く誰でも簡単に入ってこられることから、立地、建物の条件ともに理想的な場所であったという(図2, 写真3・4)。この物件は、元々資材倉庫であり、中に様々なものが残されたままに

◆ コラム 3 Associazione Comunità San Benedetto al Porto

この協会は、サン・ベネディット教会の司祭としての活動をもとに、立ち上げられた共同体が元になっている。協会では、人間関係、文化、仕事 *relazioni, cultura, lavoro* を3本柱として、「積極的アプローチ」による介入支援を行っている。この「積極的なアプローチ」は、従来の単純な福祉的、垂直的、臨床的治療的な性質を持つ介入モデルに代わるものとして定義されており、支援者らは被支援者本人を中心に据え、選択と自己決定の能力を重視し、自分自身の生活を自ら大幅に改善するモデルを共有している。これは、オーストリアの実存神経精神科医ビクトール・フランク博士による『人間の意味の探求 *Man's Search for Meaning*』に紹介された、プロアクティブ *Proactive* の概念：状況や文脈に関係なく、勇気、忍耐、個人の責任、選択の存在を意識することが重要、という考え方に端を発している。

■人間関係

協会は、自らの支援活動の目的を、依存と不快感のメカニズムとの関連性を読み取る「受容のメカニズムと関係的な効果的な封じ込めのメカニズム」を活用し、世界とその関係性を再構成し、心理的条件と肯定的な関係の文脈をつくること（そして、自分自身を社会的文脈へと拡大していく）、集団の中で自己管理や徐々に責任を負う傾向を育て、社会的モデルやルールを受け入れ、批判的意識を持ちながら自分の選択や行動を自己決定する

能力を身につけることであるとしている。

■文化

協会は、社会で起こる大きな変化を注視するための「批判的な良心」を育てることを重視している。このため、“文脈や、参照するモデルに興味や好奇心、緊張感を持たないときには、批判的な思考はできない”という考えにより、広義の文化的活動に取り組んでいる。この文化的活動には、本や新聞を読むこと（の支援）、演劇の練習、会議、学修コース、イベント、研究活動などへの参加、が含まれる。

■仕事

協会の活動のなかには、例えば酒やドラッグの依存症患者の更生と社会復帰支援、移民の地域定着支援等が含まれるが、こうした活動で「就労支援」が重視されている。これは、“仕事は、人間関係が強化され検証される領域 *territorio* となる。そこでは尊厳と自尊心が回復され、共通の善と目的を達成するための緊張感の中で自己を活性化させることができる。”という思想による。

■コミュニティ・テリトリー

こうした思想は、啓蒙思想や合理主義に疑問を持ち、また個人の発達や文化に関心を向ける批判理論に特徴付けられるフランクフルト学派や、一切の理論的先入観を持たずに事象／存在者そのものに接近して還帰を目指す現象学派の流れを汲んでいる。協会は、固定的なテリトリーの中のコミュニティではなく、コミュニティがテリトリーを形成するという方向を共有する。このコミュニティ・テリトリーをつくり、そこで対象者が統合と関係性の発展を体験できることが目指されている。



写真5 住民と考えたコンテナ状のボックスの提案

どんなアイデアが地域住民とのディスカッションで出され、検討を重ねられて実現したかが、パネルにされて壁面に掲示されている。記録として残されることで参加者はプロセスに誇りを持ち、自分たちのスペースとして愛着を抱くことができる。また、あとから参加した人々にとっても、場所の経緯と文化を共有できる仕掛けとなっている。これも「ドキュメンテーション→p.38」の一種であり、社会的事業の文化として根付いていることがわかる。



なっていたため、片付けて使えるようになるまで1年間かかった。また改修のために民間のファンドを集めて45万ユーロを確保した。

3. 地区の家の活動

1) 住民参加による場所づくり

いるだけで、緩やかに全体がつながっている。この建物を2010年に買い取ってから各種の準備を重ね、2011年にオープンした。全て安全基準をクリアしないと一般の人を入れられない。厳しいものはあった。

■オフィス

仕事の場合は地域・現場にあるので、デスクにスタッフががいることはほとんどない、このためオフィスはごく小さくて良い、という考えから、オフィスは最小限の大きさで設置されている。

■コンテナを利用したミーティングスペース

地域住民との議論のなかで出てきたアイディアの実現例の一つが、地域の人の提案で設置された、コンテナを利用したボックスである。倉庫は広く、天井も高いために温熱環境や音環境の観点では不利だが、地域の中に、常に暖かい場所をつくりたい、という思想があった。このコンテナを改造したボックスによって、断熱・防音を確保したスペースを確保できた。

このボックスは主にミーティングスペースとして使われ、午前はイタリア語の講座、午後は放課後学習の場として利用されている。内部はかなり広く、ここでは市民のアソシエーションが集会をしたりレクチャーしたりとさまざまな活動も展開しており、最大100人程度の会合を開くことができる（写真6～8）。なお、移民等を対象に開いているイタリア語の講座は、現在は100人以上が申し込みをしている。また放課後学習に来る子どもは15人であり、これらの講座や機会はすべて無料で提供されている。

■体育館、カフェ、ジム

他にも、市民が無料で使うことができるスペースとしてテーブルホッケー台が置かれた体育館やコーヒーなどを提供するカフェバーもある（写真9,10）。倉庫の上は、ジムとして使われている（写真11）。

■資材置き場

資材（衣類等）置き場があり、ここに毎日市民や潰れた洋服屋さんから大量の衣類が集められている。そして、精神疾患などの人たちの就労事業として、それらの分類・整理の仕事が行われている（写真13）。ここで整理した衣類や物品をアソシエーションが運営するリサイクルショップ、セカンドライフで販売したり、無料でカトリック系の組織に寄付している。

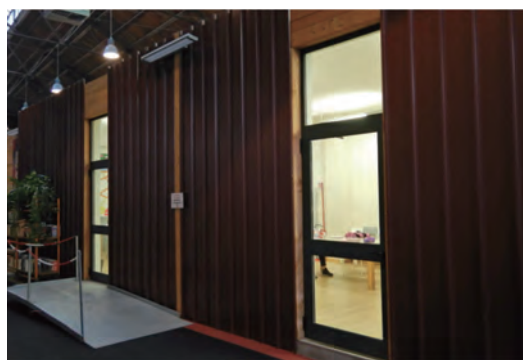


写真8 ミーティングスペース内部



写真9 体育館



写真10 体育館とカフェバーの配置

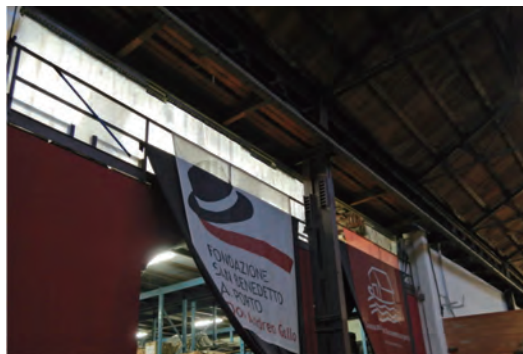


写真11 倉庫の上のジム



写真 12. カフェバー



写真 13. 資材置き場



写真 14. 「お隣さんマーケット」のちらし

3) 地区の家の活動

地区の家では日常生活の調停と支援を行う活動を行っており、あらゆる市民から相談を受けている。たとえば家庭内暴力や仕事が見つからないこと、仕事を探しにアレッサンドリアに来たが泊まる場所がないなどの各種の相談が年間 2000 件ぐらいある。

また、月に 1 回市民のフリーマーケット、「お隣さんマーケット」を行っている（写真 14）。毎回の定員は 100 ファミリーで、抽選で出店者を決める。各ファミリーが自宅等で余ったものを出品し、品物の値段は各ファミリーが決める。出品するものは何でもよいことになっているが、90%が衣類で、10%がそれ以外のものである。出店料は 5 ユーロと安いので、参加希望者が多い。このため毎回 30-40 ファミリーは抽選から漏れてしまうが、抽選から漏れたファミリーは次回に参加する権利があり、毎回同じファミリーが出展することにならないように工夫している。このマーケットの開催は、アソシエーションとしては収入にはならないが、住む人も働く人も何らかの「繋がり」ができることをテーマとし、こうした機会はこの地区を盛り上げる投資として位置づけている。

これらの活動以外にも毎週火曜日には食料の配付を行う活動、シフトを組んで夜回りをして、寝泊まりに困っている人がいないかをみたり、違法な売春が行われていれば（多くの場合は騙されて連れてこられ、働かされている女性であるため）声をかけて支援が必要でないかを尋ねる活動などを行っている。必要であれば保護し、支援に繋げる。近年ではだまされて連れてこられたナイジェリアの女性たちが多い。また、こうした移民・難民等へのイタリア語の学習だけでなく、職業訓練としてセカンドライフで裁縫の訓練を行っている。

このように、アソシエーションの活動は市民への日常的な居場所の提供やつながりの機会の提供にとどまらない。また、支援を必要とする人の訴えや依頼を待つだけでなく、街に出て支援を必要な人を探すという積極的な保護活動から、自立支援に向けた各種のサポートまで、一連の活動が行われている点が特徴的であり、「地区の家」はその拠点としても機能している。

4. 地区の家とアソシエーションの運営

1) スタッフ

地区の家を拠点に活動しているメンバーには、8人の有給スタッフと12人のボランティアがいる。各事業の現場にそれぞれ散っているのも、メンバー同士がなかなか顔を合わせないこともある。アソシエーション(のうち、アレサンドリア支部)は、毎年さまざまな事業委託等や助成金により、12万ユーロの資金を集めている。ここから家賃や人件費を支払っているため、スタッフの生活を考えるとやりくりは楽ではないが、好きな仕事を好きな仲間とできて贅沢できないけど過ごしていけるので気にしないそうである。

2) 事業内容

委託事業の一つとして、州や市から資金を受けて夜間のパトロールを2チーム(各4人)で行っている。1チームはホームレスの人に対し寝袋を提供する取り組みを行っている。また、いらなくなったキャンピングカーを2台もらい、市の許可を取ってその車を街の中の2箇所において、寝起きできる場所を提供している。例えば先週のパトロールでは野宿していた人は14人いた。こうした人たちに声をかけ、野宿がづらいようであれば、今はキャンピングカーに3人が泊まっている。もう1チームは、先述の売春を行っている人のケアをしている。

3) 資金繰り

地区の家として拠点を構えた当初のアソシエーションの収入は80%が公共からの資金、20%が民間の資金で構成されていた。現在では55%は公共からの資金、45%は民間の資金(寄付や、銀行やファンドからの資金)で構成されている。ファビオ氏は、以前は民間営利団体はソーシャルな活動はしていないという認識であり、民間営利団体とは協働関係をつくってこなかった。しかし、

注 4) <http://www.portoidee.eu/web/porto-idee/>



写真 15 Porto Idee の外観



写真 16 入り口付近から撮影した内観：右にコンテナ状のボックス、左に集会スペース



写真 17 日干しブロックのディテール

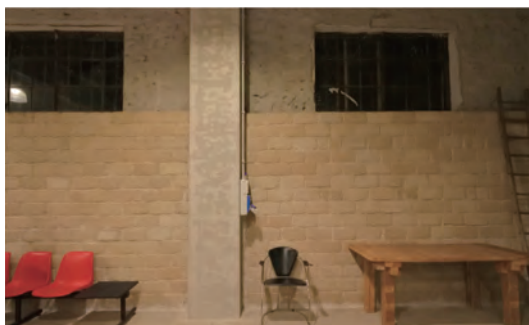


写真 18 壁一面に取り付けられた日干しブロック

後述するコワーキングスペースを運営する団体と知り合うことで、**営利を前提とする**民間団体でもソーシャルな取り組みをしていることを理解した。**こうした機会を得て**、町のお店や**他の**アソシエーションと協力することで、**いろいろな人と**出会うこともでき、町の人が困っていることに目を**開け**、新しい可能性が広がる、と考えを変化させていった。その結果が資金構成の変化に表れている。

5. コミュニティセンター、Porto Idee の活動

1) 建物の概要

■開設の経緯

地区の家を開設後、道路を挟んだ向かい**にある**、約700㎡の工場を借り受けた。工場は閉じてから2年間空き家であり、屋根が壊れ、排水もよくない状態の建物であった。**10年契約で借り**、**最初の1年目**は大家が無料で使わせてくれて、2年目からは**年間12円**の契約をしている。**この建物**を15万ユーロで改修し、Porto Idee（意：アイディアの港）と名付け、2016年3月に開設した。改修費15万ユーロのうち5万ユーロを市が提供し、部分的に市がスペースを借りている。**この取り計らいは**、これまでの**地区の家等**の取り組みを**市が**評価してくれたことによる。

■空間構成・諸室

建物の空間構成としては地区の家と同様入れ子状にコンテナ状のボックスを設置している。入り口そばには就業のための相談・支援窓口がある。

その奥にカフェスペース、修理工房がある。通路を挟んで反対側に集会スペースがある。その奥に2018年の改修で間仕切りを設けたコワーキングスペースやfablabがある。

■特徴的な内装

改修資金が潤沢ではなかったため、一部DIYで改修を行った。建築業者に教えてもらい、簡単な機材で作ることができる、麻と石灰と真水を混ぜて日干ししてつくるブロックを壁の**仕上げ材**として積んでいった。このブロッ

クは材料は自然素材で、日干しで乾燥させるので製作にエネルギーを使わない点、軽くて断熱・防音効果があり空気が通る点に特徴がある（写真 17・18）。このブロックは水にも強く、乾くと外壁にも使える。近年では、建物の建築や改修にこうした技術を使った事例が増えている。どこでも使えるので、資金のない現場での採用が増えているのだが、Porto Tdee のような、人々が集まる場所でこのような素材が使われていることは、自分たちでもこんな改修ができる、住環境の改善を自分たちでもしよう、と地域の人々に思わせるきっかけにもなっている。

開設当初は資金がなくて各スペースを仕切る扉もなかったが、2018 年には民間のファンドを得て、約 3 万ユーロをかけて間仕切り壁を設け、コワーキングスペースの居住環境を改善した。

2) 活動内容

この場所は、一言でいうと「仕事をテーマにしたコミュニティセンター」である。ここでは 5 人のスタッフが働いていて、主な活動は 6 つある。コワーキングスペースの運営活動、3D プリンターなど道具を提供する fablab の運営、DIY で修理などができる工房（写真 19～21）、就労支援のためのファーストステップのための窓口活動（写真 22）、さいごに 250 人程度が入れる集会スペースの運営で、この場所を企業等への貸し出しや、市民のコンサートなどイベントへの貸し出し、企画支援を行っている（写真 23・24）。

コワーキングスペースや fablab は世界的にも増えているが、ここには就労支援窓口があることが特徴的であり、「仕事をもつこと」が社会との接点であり自己成長のために重要であるという、アソシエーションの理念に合致する機能でもある。ここでは日本でいう職業安定所に行く前段階の相談・支援（履歴書の作成方法等）を行っている。職業斡旋所に行くことやそれを見られることを精神的に負担に思う人にとっても、この建物にはいろいろな機能があるため、ここに入るときに「あの人は仕事がなく探しているんだ」とは思われたい、という安心感がある。就労のための窓口がこのような日常に根ざしたオープンな場所にあることで、気軽に仕事について相談できる場所となっている。

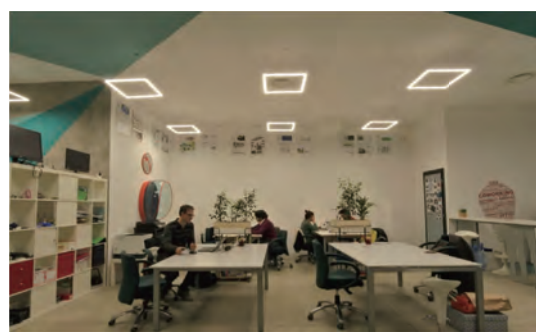


写真 19 コワーキングスペース

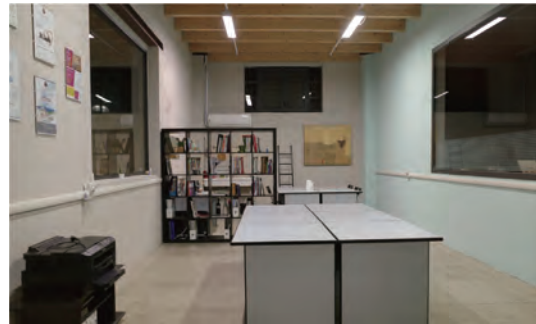


写真 20 コワーキングスペースの打ち合わせ室：左に fablab、右にミーティングスペース

これらの個室は、コワーキングスペースの会員がミーティングしたい時に予約制で使える。



写真 21 fablab

ものづくりをしたくても個人ではなかなか持てない、3D プリンタ、レーザーカッターなど最新の機材を提供し、使用方法のサポートもしている。ビジネスとして経営されるファブラボもあるが、ここはボランティアベースで、儲けのためではなく、挑戦したい人に機会を与えるという趣旨で運営されている。よく、大学の人たちが試作品を作りに来る。このファブラボ独自のプロジェクトとして、障害者のための自助具を作成している。これまでに、ショップの警備用のプログラムとそれに連動するガジェット、プログラム Amazon Go（どの棚から何をとってもビデオカメラで認識するプログラム。無人コンビニに採用されている）、自分で話すことができない病人などが装着すると、その精神状態や鼓動の変化を察知して支援者にアラートを送るヘルメットなどが、ここで開発されてきた。



写真 22 入り口付近に配置された、就業のための相談窓口（ガラス部分）



写真 23 集会スペース



写真 24 道路に面して設けられたくつろぎスペース

3) コワーキングスペース（ミコ氏へのインタビュー）

■開設経緯、運営者

コワーキングスペースの運営は、ミコ氏を代表とするアソシエーションが行っている。アレッサンドリアで10年前からに低所得向けの集合住宅の1階の2住戸を借りて「場所と時間、機材を共有する」コワーキングスペースの活動を行っており、ファブラボも経営もしていた。

ファビオ氏と数年来つきあいがあり、地区の家とも色々と一緒にやっていたので、自然な流れで2018年にここに移ってきた。元の場所はあまりきれいでなく、自分のクライアントを連れて来づらかったが、ここにクライアントを連れてくると喜ばれるなど、会員たちにとっては良い効果があった。

■活動の内容

これまでにこの活動に参加、または利用した人は1000人以上に登る。また、その業種も100種類以上である。ここでスタートアップし、今では年収何億何十億の企業に発展した例もあれば、ここで出会ってパートナー組むことになり、出て行った人たちもいる。

イベントをしたり、面白そうな人を引き合わせたりと、人々を結びつけることも重要な役割であると考えて活動してきた。参加している人たちにどんな技術や知識を身につけたいかアンケートを取ると、参加者のなかにはそれがわかる人がいる。そこで、その人に講師になってもらい、お金を取って講習会を開く。そのように、「技術や知識の相互移転」の場としても機能するように運営がなされている。

■利用体系

コワーキングスペースの利用料金は、135ユーロ/月で、これは自分で契約するインターネットの利用料金程度の金額である。この金額で毎日いつでも利用することができ、利用料にはインターネット使用料、コピー機使用料、文房具の使用料も含まれている。利用者は自分のPCだけを持ってくれば良い。また、条件付きの一部利用で10ユーロ/月、35ユーロ/月、90ユーロ/月の価格設定がある。また会議室の利用で時間帯・会員種別によって5～25ユーロの価格設定がある。いろいろなタ

イプの仕事をする人にとって使いやすいよう、どれくらい使うかを色んな形で決められるように利用体系を設定している。

現在、毎日フルタイムで利用している者は10人ぐらいで、パートタイム利用（週に1回や午前だけという利用の仕方）が10人ぐらいいる。ミーティングルームやファブラボだけ借りる人もいる。

■利用者、多様な利用形態

平均年齢は40歳ぐらいであり、フリーランスの人が多いが、企業の従業員もいる。例えば、「北イタリアオフィス（拠点）」を持ちたいシチリアの企業が、フルタイムでデスクを借りてオフィスを構えている例があり、実際にはたまに使われている。宇宙ロケットの部品を作っている会社では、3人の従業員がこの近くに住んでいるため、ミラノの本社まで出社に及ばずと、3人用のオフィススペースを借り上げている。いろいろな使われ方がある。

戦略的に、学生の間からの起業や、すでに企業等で働いている人との繋がりをつくることも目標としており、大学にも利用の働きかけをしている。いまは、現役の学生が2人、ここを利用してくれている。

利用圏域としては、基本的にはアレッサンドリアに住んでいる人が利用しているが、なかには30キロほど離れた場所から通っている人もいる。こうした人々は、是非ここに来たい、というよりも、コワーキングスペースが近くにはないのでわざわざここまで来ることになっている。

興味深い利用例として、利用者のなかの2人のアルゼンチン人は、ペルーのコマーシャルを作っている。この人たちは15キロほど離れているところから来ているのだが、アルゼンチンと時差があるため夜ここに来て仕事をしている。このコワーキングスペースが夜でも使えるため、このような利用のしかたが可能になっている。

このコワーキングスペースでは人と人を結びつける取り組みをしていて、お互いの技術を提供し合う取り組みや、さまざまなイベントを行い、新しいビジネスを生み出そうとしている。実際に、この場所での出会いが新しいビジネスにつながることもあり、例えばウェブデザイナーと販売員が一緒になって小さな広告店を作ったという例がある。ミコ氏自身ここで法律家の専門家と知り合って、コンサル会社を作り、別に経営をしている。



写真 25 fablab での試作品、練習用習作



写真 26 fablab での試作品を手にするミコ氏



写真 27 ミコ氏へのインタビューの様子

■社会的役割

例えばミラノのような大都市で、これと同じようなことをビジネスとして営利目的でする人もいるだろうが、この町で、こうした場所でこの事業を行うことには社会的な意義がある。ここに移ってからは地区の家とのつながりがあるため、社会性をアピールできる機会となっている影響もあり、社会事業としてのコワーキングであることを意識して運営している。ミコさんとしては、こうした新しい場での挑戦が、また新しいことにつながることに意義を感じている。閉じた活動をしていたらダメになる、という認識を持っており、ファビオ氏らと一緒にいることで救われている。

ファビオ氏) コワーキングは必ずしもソーシャルな人たちではない。最初は、自分たちのアソシエーションは社会的な役割をもつソーシャルの仕事をしているが、ミコ氏らは利益を求める人たちであり、自分たちとは根本的理念が異なると思っていた。10年前の収支バランスを思い返してみると、当時の収入源の80%は公的資金、20%は私的資金（投資等）だったが、ミコ氏と知り合うことで、活動資金を集めることについての視野が広がった。ただソーシャルの仕事をして生き延びるわけでない、ただ利潤だけ追求するのではない、それぞれの組織が、いろいろな仕事や、いろいろな側面を持っているのだなとわかった。今は、アソシエーションの活動資金の55%が公的資金、45%が私的資金調達である。資金調達以外にも外の拡がりとして、まちでお店を営み商売をしている人々や、企業の人々とも仕事ができるようになった。これは、ミコ氏と会って視野が広がったから。これまで、自分たちは他の分野の人たちと「競争」をしていた。一方で、コワーキングでは「一緒に働く」。ここでの活動を通して、一緒にやることがどれほどプラスかを学んだ。

Casa del Quartiere San Salvario トリノの地区の家（サンサルバリオ）

歴史的建造物である公衆浴場を改修してつくられた、地域住民の活動の場

【キーワード】

〔施設種別〕 ☐ 高齢者施設 ☐ 障がい者施設 ☐ 子ども施設 ☐ 住宅（住宅型ホテル） ■ 地区の家、他
 〔運営主体〕 ☐ 市区町村 ☐ 法人 ☐ NPO ☐ 個人 ■ 社会的協同組合
 〔建物形式〕 ■ 1 棟単体型 ☐ 複数棟集合型 ☐ 団地型 ☐ 集落
 〔建物状況〕 ☐ 新築 ☐ 増築 ■ 改修 ☐ 一部改修 ☐ 既存
 〔対象者〕 ☐ 高齢者 ☐ 障がい者 ☐ 子ども ■ ファミリー ■ 多世代 ■ 移民



サンサルバリオ地区の家の外観

トリノ中央駅の南東に位置する旧市街地に立地する地区の家。地域住民にとっては民設の公民館のような位置づけで、運営するアソシエーションから見ればオープン・オフィスのような方法で地域住民に活動の場をごく安価に提供している。住民の主体的な活動の場として利用されたり、各種の講座が開かれるなど活発に使われており、地域コミュニティの繋がりを改めて結び直すための拠点となっている。

視察月日 11月6日

記録担当者 西野辰哉，加藤悠介

案内者 アンドレア・ボッコ氏（トリノ工科大学教授，社会的協同組合スミズーラ代表）
多木陽介氏（通訳）

1. サンサルバリオ地区と使用建物の概要

トリノは、ピエモンテ州の州都、またトリノ県の県都で、周辺地域を含め国内第4の人口規模である約87万人を擁するコムーネである。かつては自動車メーカー、フィアットの企業城下町として、また工業都市として栄えたが、イタリア経済の陰りととともに失業者の増加や人口減が社会的な課題となっている。

サンサルバリオ地区はトリノ中央駅より少し南東の旧市街地にあり、地区人口は19,000人である。一番古い地区は緑樹帯の辺りで、この一帯は19世紀後半～20世紀初頭につくられた。現在「地区の家」として使われている建物はトリノ市の所有物で、運営団体が賃貸借の契

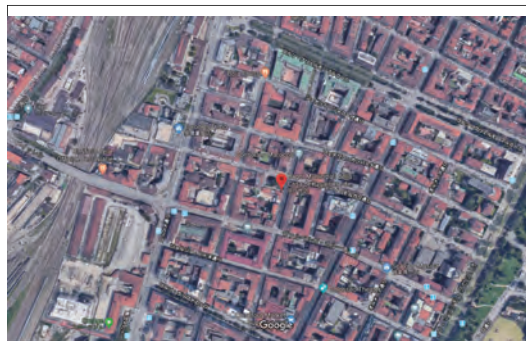


写真1 サンサルバリオ地区

同地区はトリノ中央駅より少し南東にある旧市街地。一番古い地区は写真上の緑樹帯の辺りで19世紀後半～20世紀初頭につくられた。



写真2 サンサルバリオ地区の家

1908年に建てられ、約80年間、銭湯として使われた建物。L字型平面で角入り。左が女湯、右が男湯として使われていた。



写真3. サンサルバリオ地区の家の前の小公園
地区の家の前には小さな公園があるが、ここは管理外の場所。



写真4 Parrocchia Sacro Cuore di Maria 教会
地区の家の北側、小公園を挟んで建つ教会。



写真5 入口を入ってすぐ左にあるBAR
カウンターに立っているのがサーラさん。普段は2階の運営本部にいる。心理学を勉強したが、ここでは全体プログラム作ったりソーシャル・教育関係のプロジェクトをしている。

約を結んでいる。この建物は1908年に建てられ、1944年まで約80年間、銭湯として使われた。当時は各家々には内風呂がなく、各地域に銭湯のようなシャワー施設が作られることが一般的であり、この建物はその当時の文化的遺産が今に残るものである。シャワー施設の廃業後、トリノ市の所有となっていたが、実態としては放置されており、購入者がいれば売却するつもりだったが、買い手がつかない状態であった。

建物構成はL字型平面で、角入り、左が女湯（シャワーブース群）、右が男湯となっていた（図1）。

2. 地区発展事務所の開設

（アンドレア・ボッコ教授へのインタビュー）

ボッコ教授は1990年代前半に「NGO 地区青年」という組織で働いており、アフリカに行ってハウジングを作る国際援助活動をしていた。その後、1990年半ばにアフリカ等から移民が多く来るようになったため、自分がアフリカに行くのではなく、ここトリノで、家がないアフリカ人に家を探す仕事を始めた。

当時、トリノ市内では2つの地区に移民が集中していた。一つはポルタパラッツォ（市場の辺り）地区で、もう一つがサンサルバリオ地区である。両地区とも駅に近い¹ため、外国人が流れ込みやすかった。この2つの地区に対するトリノ市の対応は異なった。ポルタパラッツォ

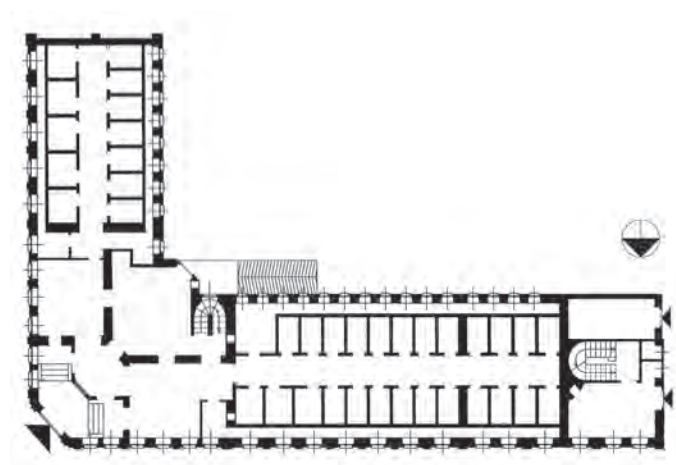


図1 公衆浴場の頃の平面図

地区はEUからのまとまった補助金を得られたのでトリノ市がプロジェクトを行った。一方、サンサルバリオ地区ではそうしたプロジェクトがなかったため、我々のNGOでやろうという手を上げた。また、サンサルバリオ地区を活動の場所として選んだのは、ボッコ教授自身が生まれたのがこの地区であり、元々の住民と移民との摩擦が生じてしまっていることについて、その解決のための調査をトリノ市から依頼されたこともきっかけの一つである。

最初の問題意識は、「移民が定着する」ことであり、「流入してくる移民との共生」であった。その時にはまだ参考になるモデルがなかったため、サンバルバリオ地区発展事務所を開設した。

自分たちのNGOが技術コンサルタントとして、エスニック・文化問題、地域経済活性化などの活動を行う。決定権のある中心メンバーとして、地域の各アソシエーションの代表に参加してもらう意思決定構造とし、実働部隊として自分たちのNGOオフィスが働く、という位置づけであった。サンサルバリオの商店街などでは、そうした地域アソシエーション活動に参加する土壌がある。

3. 「地区の家」の開設と運営

(アンドレア・ボッコ教授と運営者のアンナ氏へのインタビュー)

1) 「地区の家」の開設

1999年のNGO開設当初、サンバルバリオ地区発展事務所は緑樹帯の向こう側に開設した。そこはかつて有名な菓子店が店を構えていた場所で、「ヌテラ Nutella」というチョコレートスプレッド（ココア入りヘーゼルナッツペースト）が発明された店だった。そうした地域の誇りと文脈のある場所への敬意もあり、その場所でもカフェを出していた。この時からソーシャルかつカルチュラルなスペースをもちたい、図書館もつくりたいという夢があったが（このときに話を聞こうと思っていたのがアントネッラ・アンニョリ氏）、お金もかかるため、実現できなかった。



写真6 エントランスにある看板

建物中にはいろいろな部屋があり、誰でも入れて会員登録などは必要ない。



写真7 エントランスの隣にある情報コーナー

開催されている講座内容や相談窓口に関する資料などが置かれている。



写真 8 一旦中に入ってから出る、閉じた安全な中庭
中庭は子連れの家族が何をするでもなくいられる。日当たりが良く、ダンスもできる。スクリーン設置可能。

転機は 2006 年。イタリアにおける問題山積地区における社会的活動に対する Voderfone 財団のコンペに当選し、50 万ユーロの支援金をもらってこの社会的事業を始めることになった。但し、このお金は自分たちの所有物でない建物に対して使うことが想定されていなかったため、この場所が社会的で、かつ意味のある場所になる、ということを経験して説得した。結果としてコンペの採択が最終的に決定し、Voderfone 財団の働きかけもあって、トリノ市が建物を 2010 年からの 30 年間貸与の契約で、また年間 50 ユーロのとても安い賃貸料で借してくれることになった。建物の改修も市が行ったが、公共建物のため、勝手に間仕切りや外観に手を加えられず、街路や公園に面した開口部も変更できなかった。このため、銭湯の名残で窓は高い位置にあり、エントランスも 1 箇

◆コラム 4 サンサルバリオ地区の家の活動プログラム

「サンサルバリオ地区の家」で行われている活動には、無料窓口サービスと有料講座がある。

右の青い冊子は生活に困った住民が聞きにくる窓口サービスのパンフレットで、これらのカウンセリングやサポートは全て無料で提供される。

一方、右の赤い冊子はコーラスやダンス講座などをリストアップした冊子で、ここに掲載された講座はすべて有料である。ただし、会場費として時間単価での費用支払いを求め、講師への謝金の有無は使用条件に問わないが、参加者が支払う費用が高額である場合には、地区の家の使用は認めていない。これらの講座は、この地域の住民がうまく他の住民と出会って何かの楽しみをともにする場を与えるためのプログラムである。何かをするように、運営者が働きかけることはなく、活動が自由に生まれていくように支援し、生まれた活動の継続と発展を支援するのが運営の仕事である。さらに、運営者スミズーラはただこれらのプログラムをオーガナイズするだけでない。いくら安くても参加するのが難しい家庭もあるので、子供を参加させるための経済的な側面も含めた支援体制もある、とのことであった。

活動プログラムをみてみよう。まず青色の無料窓口サービスには、退職者活動、Ufficio Pio の応募支援、家族情報窓口、難民の住居手配情報、移民の経済相談、訴訟に関する法律相談、人間関係の争議に関する法律相談、就労支援、青少年相談、女性相談、弱い男性のための相談、家族問題解決窓口、弱い女性のプチ起業相談、がある。

一方、有料の講座プログラムには、各種音楽・映像教室、語学講座（フランス語、英語、スペイン語、ロシア語）、ダンス教室、運動教室（ヨガ、太極拳など）、そしてアート講座がある。さらに子供用の活動もある。



写真 1. プログラム冊子

左が有料の講座プログラムのリスト、右が無料の窓口プログラム。

所のままである。他に、工事業者は入札で決めないといけないというルールもある。それなりに制約のある条件で借りることができるが、公共建物で使わせてもらえる場所はさほどないため、これでも良い条件である。

一方、NGO からコーポラティーヴァ（社会的協同組合 *Cooperativa sociale*, → p.17）に改組した新生スミズーラではトリノ以外にも行政委託の地区改善の仕事が多くあったが、「サンサルバリオ地区の家」ができて以降、地区改善業務委託がなくなってきた。また、地区の地価が上がり、家賃も上昇して貧しい人々は住み続けることが難しくなるという、事業の成果の思わぬ波及効果もみられるようになった。そこでスミズーラを解散するか、或いは起業するか議論した末、自分たちでヴィア・バルテア（→ p.94）を起業することにした。サンサルバリオ地区の家ではトリノ市の建物を実質ほぼ無料で借りて社会的機能の場として運営しているが、こうした支援なく事業を展開できるかの挑戦を行う意図もあった。

2) 「地区の家」の活動

地区の家の活動には、住民たちに活動の場を提供する役割と、社会的協同組合としての地域支援活動がある。

住民たちに活動の場を提供するため、指導的立場ではなく、住民が自分たちで活動を提案して、自らの運営の元で活動することができるように支援している（◆コラム 4, → p.89）。例えば、高齢者のコーラス、中学生の補習をするコース、ポピュラーソングや子供オーケストラ、それらの活動に参加するための基礎コースもある。他にも子供用のサーカス講座、コンピュータオタク講座、パーカッション講座など、多様な講座がある。様々な関心のある住民たちが共存できるよう、つまり例えば音が気にならないように部屋や時間をずらしたりしている。

地区の家としての活動は多様だが、例えば最近では、交通巡査と建築家が近くの家が雨漏りしカビが出て崩れそうだと助けを求めてきたので介入の方法を相談した。

学校や幼稚園ともコラボレーションを行っており、例えば取材日の朝は幼稚園児のために栗のお菓子づくりラボが開催されていた。このように「外の活動」が、地区の家の中に流れ込んで来る。外には選択可能な場所が必ずしも多くないので、地区の家も教育の場になっている。



写真9 カフェ

BAR を抜けた所にあるカフェは周辺のオフィスの人や学生がランチを食べにくる。講座が終わってから食べて帰る住民もいて、夕方の時間も大変賑わっている。周辺には最近になってたくさんの飲食店ができ、値段も様々である。地域にはブルジョアから庶民までいろいろな階層の人がいて、地区の家で安く飲食が提供されることで、地域の他の店舗への悪い影響はない。



写真10 講座室

平日夕方は様々な講座でほぼ満室となる。但し、以前、若者が夜に騒いで近隣から苦情が出たことがあり、騒音がでる活動には貸さないようにしている。



写真11 ボッコ教授とアンナさん

真中がアンドレア・ボッコ教授、右が創始者の一人アンナさん。左が多木さん。



写真 12 屋上広場

小学校が 16 時半に終わり 17 時前には児童で大にぎわいになる。

注 1) 新自由主義：政治や経済、哲学の分野における思想。日本語では複数の用語が同じ訳語で当てられている。①「ニューリベラリズム Social liberalism」では、個人主義・自由放任主義に基づく古典的自由主義に対して、社会的公正のもとに自由な個人や自由な市場の実現のためには政府による介入も必要であり、社会保障の充実が求められるという考え方（社会自由主義，社会的市場経済）。②「ネオリベラリズム Neoliberalism」では、社会的市場経済に対して再び個人の自由や市場原理に重きを置き、政府による個人や市場への介入を最小限に抑える考え方。1970 年以降の日本では、おおむねこちらの概念で使用される。

注 2)（参考文献 1 より抜粋，要約）新自由主義では「小さな国家」が期待され，そこでは医療，公教育，公益事業などの分野における国家の役割は縮小され，社会のセーフティネットは切り詰められる。統合的な社会に代えて，強力な介入と権力の行使のもとに，社会はグローバルな市場に分節化される。このとき，個人は「資本の自由な合理性」のために，自己統治の義務と責任を果たすことが期待される。グローバリゼーションを絶対的要件とする「生き方の政治」に合わせられない者は容赦なく制裁され排除される競争的環境のなかで，そこを生き抜く「エージェント」としての個人である。同時に，エージェントは自らに道徳的な義務と責任を課すコミュニティに共属する。こうして，新自由主義と，本来その対抗にあるコミュニタリアニズムはことに危機的状況において，共振する関係を持ちうる。

参考文献

1) 吉原直樹，新自由主義的な震災復興とコミュニティ戦略，特集 2 震災復興の論理－新自由主義と日本社会－，学術の動向 2013，<https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/18/10/18_10_44/_pdf>，参照 2020.10.06

その他，いろいろなコラボレーションが行われている。

3) 「地区の家」の活動組織

サンバルバリオ地区発展事務所の母体は地元の多くの市民団体であり，市民アソシエーションの**東ね役アソシエーション**として成立している関係がある。このため，すでに存在している**たくさんのつながり**をもとにした運営がなされている。様々な提案が，**地域から自然に**あがってくるが，**プロジェクトを通して**こちらから**呼び込む**場合もある。こうした**積み重ねを通して**，内側と外側がよくつながっていると**感じている**。全ての住民を対象とした**インクルージョンを目的としているため**，**繋がり**の一例として，学校はよい手段である。そのため，学校や幼稚園を通した活動は非常に重要であるとの認識がある。数年前に学校とプロジェクトを一緒に**行ったところ**とて**もうまくいったためその後も**いい関係を保っており，毎年，学校から何か一緒にやりたいとリクエストがある。

リクエストがあれば遠くから来ても拒みはしないが，ここはサンサルバリオの「地区の家」なので，一義的にはこの地域の人を対象に想定している。実際には，イベントを行うと別地区から来る人もいる。本来は，各地区にこうした「地区の家」があるのが理想的である**と考えている**。トリノでは現在 8 カ所の「地区の家」が機能しているが，各地区に設置するとなると 23 カ所必要になる。

4) アソシエーションと社会的協同組合

「なぜイタリアではつながりをつくろうとする場が出てきているのか？」という問いに対する，ボッコ教授の返答。

制度上，現代社会は，個人どうしが競争に置かれて，敵対する社会になっている。いわゆる「新自由主義^{注 1)}」の思想のもとでは，国と個人が経済的に**直接**つながる関係を持ち，中間組織としてのコミュニティを認めない^{注 2)}。しかしイタリア社会では一緒にいることを楽しむという基本的イデオロギーを共有しており，イタリア市民には**中間的コミュニティを求める感覚がある**。トリノは 20 世紀から工業都市として発展し，**たくさんの労働者が**

流入した。こうした労働者は地盤的安定性を持たず、権力と対抗するために結束して、協働の組織体をつくった。トリノはこうした連帯の文化が育まれた街である。そのため古い地区人口 12,000 人に対して、アソシエーション（市民団体、互助会）が 500 団体もあった。これは、イタリアの一般的な街に比べてとても多い。スポーツ、文化、宗教、商店街（イベント開催）、公園掃除ボランティアなど、ありとあらゆるアソシエーションがある。

5) 「地区の家」の貸室運営

夕方以降は、「地区の家」の運営本部事務所は鍵を締

注3) アソシエーション (→ p.17) は3人からコミュニティに登録可能で、収支決算を出す必要がある。経済的利益を生み出す活動もできるが、基本的には利益を生まない組織である。一方、社会的協同組合は企業体(会社形態)である。普通の企業は社長や役員という経営者がいて従業員は会社とは雇用関係にあるが、社会的協同組合では従業員一人一人に決定権がある。例えば、社会的協同組合が船を所有し、それに参加している漁師(会員)は組合が所有している船を使う。そして船が壊れた時には社会的協同組合で直す、或いは捕った魚を社会的協同組合で売りに行く、等の互助的組織でもある。日本では事業協同組合が相当する。

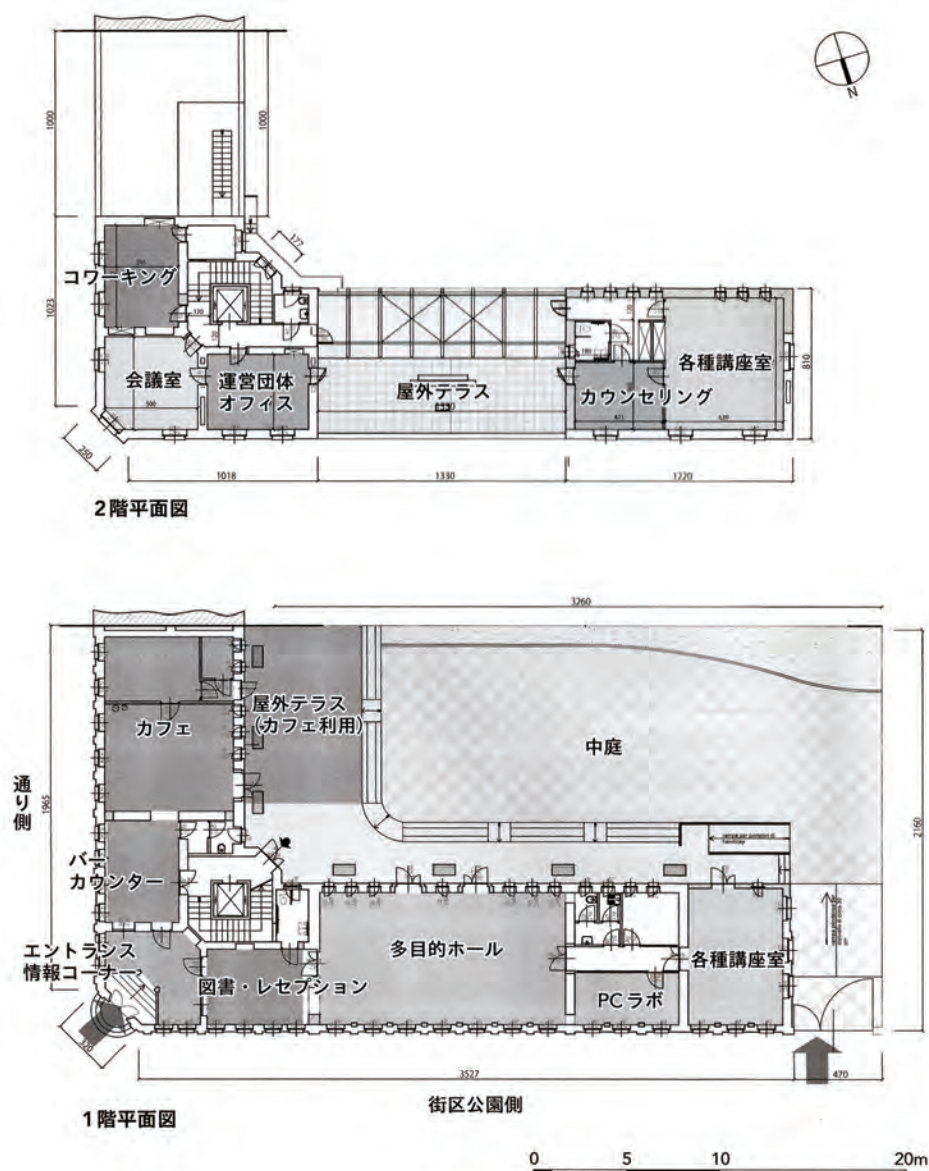


図2 サンサルバリオ改修後の平面図

図1および図2の出典:『「地区の家」と「屋根のある広場」 イタリア発・公共建築のつくりかた』小篠隆生・小松尚著、鹿島出版会、2018



写真 13 夕方の小公園

地区の家の前にある小公園は薬物中毒者やホームレスがいたり無法状態になっている。しかしこの場所は管理下ではないため、どこまで介入するかが課題。

めているが、**その後は**他室は各使用団体に戸締まりを任せている。これだけ場所があり多くの人が来ているので、**全ての時間帯には**対応できないので、責任を課して自分たちで掃除し鍵を閉めてもらうことにしている。「自治」によって、**活動時間の自由度を確保できる仕組みである**。ただし、毎朝、清掃業者を入れている。利用者は**講師やプログラム運営者に**授業料を払い、講師らは部屋使用料を「地区の家」に払う。**平日は講座開講が基本で、週末だけパーティなどにも貸し出す**。使用料はとても安く、**有料プログラムの場合で**1時間9ユーロ、無料講座はさらに安い。子供の誕生パーティなどで午後いっぱい借りても70ユーロである。**利用料の基本的な方針として、私的な活動はそれなりの金額をとり、公的な活動の場合は安く抑える**。以前は、夜もパーティーで貸し出ししていたが、騒音に関して近隣住民から意見が出されたため、現在は**大きな音の出る活動には**貸し出しをしていない。

特に高齢者が多い地域ではないが、高齢者プログラムは**多彩**である。お話し会、ポピュラーダンスクラブ、市民社会擁護の女性の会、おじいちゃんの会、年金生活者クラブなど。障がい児に特化した講座はないが、障がいがあっても他の**場所**に行きにくい子たちが、**なるべく他の子と同じようにこの場に来られるようサポートしている**。また、運動や乗物で怪我をしやすい活動については、その活動をする団体に独自で保険に入ってもらっている。

6) 「地区の家」の課題と将来

「地区の家」の中だけでなく、地域と**連携した**プロジェクトがいくつかある。例えば、**fa bene** ファベネ（食べ物を貧しい人にお裾分けするシステム、→p.96）を**サンサルバリオ地区**のマーケットでもしている。また余った食品・不要品を、**それを必要とする貧しい人に****ONLINE**で**マッチング**して配る**活動**も行っている。

今後の見通しとして、例えば30年後には、私たち**現スミズーラのメンバーはもうおらず**、その時の市長がどんな人かによって、**街のあり方が作られている**だろう。今はこうした場所が1箇所だけでなく**数カ所あり、それらの間でのネットワークが**できているため、社会的存在として発言権が強い。このため、「地区の家」や、**そこを拠点とした活動は**、そう簡単にはつぶされないだろう。

Casa del Quartiere Via Baltea トリノの地区の家（ヴィア・バルテア）

印刷工場を改修してつくられた、文化的活動や交流、カフェなど多様な活動の場

【キーワード】

〔施設種別〕 ☐ 高齢者施設 ☐ 障がい者施設 ☐ 子ども施設 ☐ 住宅（住宅型ホテル） ■ 地区の家、他
〔運営主体〕 ☐ 市区町村 ☐ 法人 ☐ NPO ☐ 個人 ■ 社会的協同組合
〔建物形式〕 ■ 1 棟単体型 ☐ 複数棟集合型 ☐ 団地型 ☐ 集落
〔建物状況〕 ☐ 新築 ☐ 増築 ■ 改修 ☐ 一部改修 ☐ 既存
〔対象者〕 ☐ 高齢者 ☐ 障がい者 ☐ 子ども ■ ファミリー ■ 多世代 ■ 移民



カフェレストランの内観

トリノ北部エリアに立地する地区の家。商業的な収入を得ながら、住民に文化的活動や交流、飲食の場を提供し、また移民への職業訓練等の支援を行う複合的な社会事業の拠点である。中庭を囲む元印刷工場の建物に、各種の活動室や工場など多様な場を設けられ、地域住民も参加して場づくりがなされている。中庭は地域の人々が自由に入出し、滞在できる空間となっており、まちの人々が集まる地域の交流拠点である。

視察月日 11月6日

記録担当者 山田あすか

案内者 アンドレア・ボッコ氏（トリノ工科大学教授、社会的協同組合スミズーラ代表）
ラッラ氏（ヴィア・バルテア事務所代表）
多木陽介氏（通訳）

1. トリノ北部エリアと周辺地区の概要

トリノ駅西側からローマ通りをトラムで北上すると、サン・ジョヴァンニ・バッティスタ大聖堂 Cattedrale di San Giovanni Battista、パラティーナ門跡 Porta Palatina を経て、ポルタ・パラッツォ Porta Palazzo（城門広場）に至る（写真1）。この広場で毎朝開かれる朝市はイタリアで最も大きく、ヨーロッパでも最大級の規模を誇る。食品だけでなく、衣類や生活雑貨など、様々な屋台が建つ。トリノには朝市の文化があり、各地区に朝市で朝市が開かれている（写真2～4）。

トリノの城壁外エリアは19世紀以降に発展を遂げた。



写真1 トリノ市街地 (googlemap より)

トリノ駅から北上すると、ローマ時代の門と城壁の跡がある。ポルタ・パラッツォ Porta Palazzo（城門広場）は、城壁跡につくられた広場で、トリノ旧市街地の北の玄関口である。さらに北上すると、ドーラ・リパリア川を渡り、トリノ市北部エリアに入る。



写真2～4 ポルタ・パラッツォ広場の朝市



写真5 バッリエーラ・ディ・ミラノ地区の散策
アンドレア・ボッコ教授にお話を伺いながら地区を散策する。

ポルタ・パラッツォ広場からさらに北上すると、ドーラ・リパリア川(北イタリアを貫くポー川に注ぐ支流)を渡り、その先がトリノ北部地区である。この川はかつてしばしば氾濫を繰り返しており、地形的に不利な条件であった。こうした地理的特徴もあいまって、この北部エリアの居住者は低所得者層が多くを占める。トリノには全部で44箇所の地域があり、この北部地域はイタリア全土(南)方向、例えばミラノ方向へつながる入り口／ゲートの役割を果たしていた。このため、エリアの名をBarriera di Milano ミラノの障壁／境界／関所という。

鉄道ができたことで、トリノにも大きな工場がたふさんでき、工場で働く人口も流入してまちは工業都市として発展した。しかし、今ではそうした工場はほとんどがなくなった。かつては、このバッリエーラ・ディ・ミラノ Barriera di Milano 地区は1906年頃(第一次世界大戦より少し前)に工業エリアとして開発された、2,000万平米の規模を誇る工場地域であった。例えばこの地域にあった大きなFIAT工場では船や工場で使うモーターをつくっており、多くの労働者を抱えていた。こうした労働者には、もともとは山間部、田舎の地域から流れ込んで来るケースが多かったが、1950～60年代にはイタリア南部からの移住が、またそれに遅れること20～30年ほどかけて、次第に国外からの移民も増えた。今では50～60年代に移住してきた人々が定年退職を迎える時期となっている。今後はこうした人々の高齢化への対応も大きな課題となることが予測される。

2. バッリエーラ・ディ・ミラノ地区マーケットでの活動

1) 地区と近隣マーケットの概要

この周辺地域の建物は、だいたい20世紀前半につくられた(写真6)。この地域はイタリア南部からの移民が多いため、トリノに小さな南イタリアの街が移ってきたような場所である。そこに、さらに移民が暮らすようになっており、トリノの中でも最も外国人の割合が多い。南イタリアの職人の店や、細い路地にはアフリカからの

移民が開いた工房、中国人のお店とエリア全体がエスニックな様相を多分に持っている。また、こうした流入者の年代が影響して、トリノの中では比較的平均年齢が低いエリアである。また、低所得者が多く暮らす地域でもある（写真7）。

トリノでは地区ごとに朝市がたつ文化があるが、バツリエーラ・ディ・ミラノ地区では地区東側にあるフォローニ広場 Area Mercatale Foroni で朝市が開催されている（写真8）。この広場の公式な名称は**フォーロニ広場**であるが（写真9），エリアマップにはPIAZZETTA CERIGNOLA（チェリニョーラ広場）と記されている（写真10）。これは、このまちの人々がこの広場を呼ぶ名前で、この地域に南イタリアのチェリニョーラ^{注1）}から移住してきた人々が多いことに由来し、故郷に根ざした祭りも毎年この広場で行われている。

2）マーケットでの社会的活動

Foroni の朝市でも、衣料品、生活雑貨、食料品など多様な品物を扱う屋台が軒を連ねている（写真11，12）。広場に面して肉屋やパン・菓子屋などの固定店舗も数多く並んでいる。

ここ Foroni 朝市では、2008 年の経済危機を受けて2013 年に「fa bene（ファ・ベネ、「いいね」の意味）」というプロジェクトが立ち上がった^{1）}。これは、経済危機による生活状況の悪化への影響を受けて、商業に関わ



写真6 バツリエーラ・ディ・ミラノ地区①

古い建物が改修されながら使われている



写真7 バツリエーラ・ディ・ミラノ地区②

バルコニーに、プラスチックのカーテンがかけられている。トリノでは、こうした使い方を禁止しており、罰金を取られることになっているのだが、ここの住民は意に介さない。貧しい人が多く、お金がないので、警察も実際には罰金を取ることができないためである。



写真8 フォローニ広場 Market Square Foroni

広場と歩行者道路に広がる朝市。



写真9 フォローニ FORONI 歩行者エリア

広場（歩行者ゾーン）の入り口を示す路上標示。車両の進入がしにくいように石が置かれている。



写真10 フォローニ広場の
エリアマップ
公式にはForoniだが、マ
ップ上では異なる名前が記
されている

注1) プッリャ州フォッジャ県、イタリア半島の“く
るぶし”にあたる位置にある基礎自治体



写真11 Foroni 朝市の街路部分の様子
衣料品、生活雑貨の屋台が並んでいる。



写真12 Foroni 朝市の広場部分
野菜や魚介類など、新鮮な食料品の屋台が並んでいる。

1) fa bene,<<https://www.fabene.org/>>

る人々や市民，ボランティア，ソーシャルワーカー，要
支援者らの実践的な対応として発足したプロジェクト
で，組織化されたお裾分けのような取り組みである。実
際にうまく機能するまでには試行錯誤があったが，現在
は，S-nodi 推進委員会，Associazione di Promozione
Sociale（社会振興組合）Fa bene Community など9つ
の社会的協同組合，組合，財団等によって安定的に運営
されている。

その仕組みは，以下の通りである。まず，この朝市で
買い物をする人々が自分が必要なよりも少し余分に品物
を買ってお金を支払う。そして，差分の食料品などが朝
市の終了後に集められ，それらの品物は仕分けられて，
登録されている貧しい人々の家にプロジェクトの参加メ
ンバーがあとで配達する。この fa bene に参加している
店は，その旨が書かれたチラシを店頭に掲げている（写
真13）。キリスト教の歴史のなかで，寄付が日常的な行
為であることもこうした活動の背景にあると推察される。

3. 地区の家ヴィア・バルテア Via Baltea

1) ヴィア・バルテア開設の経緯

サンサルバリオ地区の家（→p.86）の開設，運営後に，
公的資金や公共施設の低廉価格での貸与によらずに，そ
れゆえに自由度高く，コーポラティーヴァ・スミズーラ



写真13 fa bene のチラシを店頭に掲げた屋台

AMICO DI fa bene (fa bene の朋友)。「Dona qui parte della tua
spesa!（あなたの食料品の一部をここに寄付してください!）」

(Sumisura sc-Resources for the Environment and the City) によって自分たちが理想とする「地区の家」のあり方を再度模索しようと立ち上げられた。開設は2014年である。サンサルバリオ地区では、地区の家をはじめとする地区改善が功を奏し地区の住環境は改善したが、トリノ駅から近い市街地中心部にあったために地域住民以外の外的要因が運営に影響し必ずしも地域独自のニーズにだけ対応することが難しい状況や、地価が上がり移民などの貧しい人々がかえって暮らしにくくなってしまいうという状況もあった。このため、スミズーラはトリノ市の中心部を離れ、社会的に困難のある地域に入ってその地域ならではの課題に向き合うための拠点をつくろうと考えたのである。

この複合拠点の正式名称は、Via Baltea 3-Laboratori di Barriera (バルテア通り3, バリエーラの研究所) という。ソーシャルなラボであり、社会的実験を行う場であるという意味を込めた名前だが、この立地に根ざした場所という親しみを込めて、ヴィア・バルテアと呼ばれている (写真14～16)。

もともとは印刷工場であった建物群で、それを改修して**社会的機能**を持たせるという、建物とまちの再生の挑戦である。ここには、**この地域のための社会的サービス**、この地域での生活を支えるための複数の活動の拠点がある (写真17)。こうした多様な**機能**があることで、**この地域の人たちが集い、そこに楽しい出会いがあるように**とのねらいで活動をしている。

2) ヴィア・バルテアの運営

この地区の家は、コーポラティーヴァ・スミズーラが



写真14 ヴィア・バルテア付近 (Googlemap より)

2) Via Baltea, <<https://www.viabaltea.it/>>



写真15 バルテア通り



写真16 ヴィア・バルテア外観

本印刷工場の改修。もともと搬入のために広く取られた入り口がまちとの幅広い接点となっている。



写真17 入り口に掲げられた看板

ここで提供されているいろいろな活動内容がモザイクのように示されている。



写真 18 カフェレストランの机と椅子

リサイクル品を集めて使われている、カフェレストランの机と椅子。地域住民から寄付された家具もある。



写真 19 カフェレストランの内観

リサイクルや自作の照明器具、家具什器など色も意匠もバラバラなモノが自然な雰囲気の中で調和している。活動内容を紹介するパネルなども飾られている。

単独で運営している。スミズーラはそれ以前のアソシエーションとしての活動を発展的に引き継ぎ、2007年に設立された。都市再生と地域開発の分野で活動をしており、多様な事業展開のために、建築分野の専門家やソーシャルワーカー、アーティストなど様々な専門家を取り込んで統合的に構成されている。中にはプロの料理人、宇宙物理学者（バーテン）、元グリンピースの活動家、経済学や人類学の知識がある人などもある。現代社会の中には、多様な隣人が共存しており、他のアソシエーションと協働することもあるし、自分たちだけでできないときは周囲に助けをもらって、プロジェクトを進めている。

なお、サンサルバリオ地区の家は建物の改修費用を市が出してくれ（その分、自由度は低かった）、建物の賃料もほとんど無償であるが、ヴィア・バルテアは民間の大家から月3,900ユーロの家賃を払って借りている。また、資金調達に民間のファンドを利用したため、それなりに商業的な活動を行って収入を得る必要がある。収入源として最も大きいのはカフェレストランで、次に製パン・製菓子工場である。また、程度の使用料を設定して、ジャズのレッスン場などテナント貸しもししている。

改修・整備費用を安く抑えるため、家具什器はほぼ全てリサイクルで作られており、買ったものはほとんどない。手に入るリサイクル品をボッコ教授などメンバーがコーディネートし、アーティストのマリオ氏が修理したり組み合わせて自作したりして使っている。オープンしたものの椅子が足りないと知った地域の人が家から不要な家具を持ってきてくれたこともあった（写真18）。

3) ヴィア・バルテアでの活動内容

元印刷工場の広い敷地と中庭を囲む建物群には、カフェレストラン、製パン・製菓子工場、工房、レンタルルーム、ホール、音楽教室、コワーキングスペース、シェアキッチンと多様な活動場所が設けられている（図1）。それぞれの場所で一定の収益を上げる必要があるが、無償や低廉な価格で利用できる場所もあり、全体で収支が取れるように運営されている。

①カフェレストラン Social Bar

カフェレストランは、いつも多くの人々に利用されて

おり、最も収益を上げている（写真 19）。ここはカフェではあるが、同時に様々な活動が行われる場所でもある。この施設に来る人々の窓口のような位置づけにもなっている。

カフェのカウンター向かって右奥には工具が展示されており、この工具は地域の人が自由に借りられる（写真 20）。これは、アントネッラ・アンニョリ氏のインタビューで言及された「道具図書館」に通じる取り組みである（→p.58）。水曜日の午後は、直したいものを持ってくれば、敷地内の工房アーティストと一緒に修理修繕してくれる取り組みも行われている。



写真 20 夕方の小公園

カフェレストランの奥の壁に、工具が掛けられている。利用者が借りていくことができる。

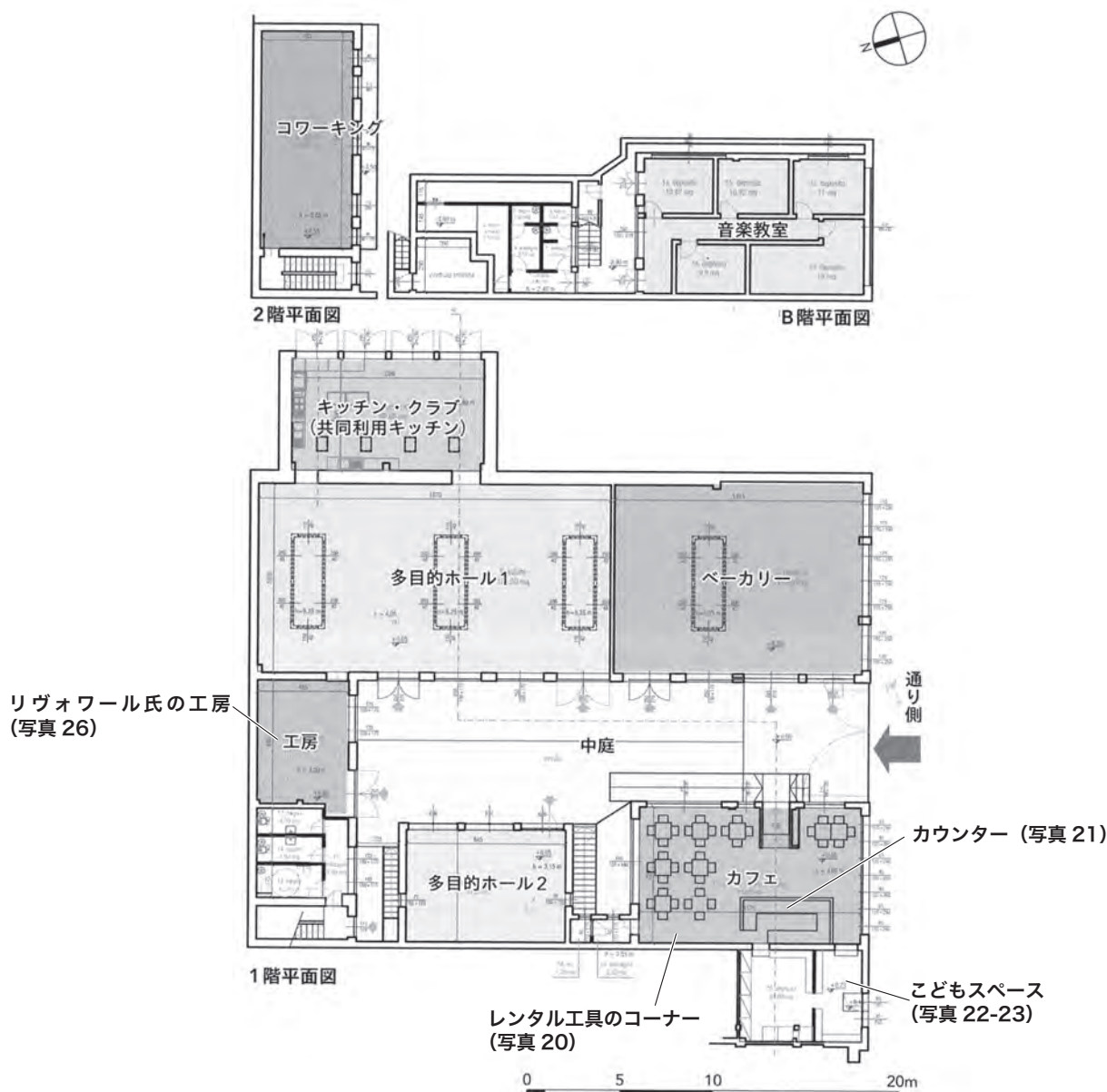


図1 ヴィア・バルテア改修後の平面図

出典：3）『「地区の家」と「屋根のある広場」 イタリア発・公共建築のつくりかた』小篠隆生・小松尚著、鹿島出版会、2018



写真 21 カフェレストランではパンも販売している
ベーカリーでつくられたパンや菓子が販売されている。もちろん、イートイン利用せずテイクアウトだけでも利用可能。



写真 22 こどもスペースの机と椅子
既製品のこども用家具と、手作りの家具が使われている。



カフェのカウンターでは、敷地内の製パン・製菓子工場で作られたパンや焼き菓子も販売されており、テイクアウトでパンを買っていく客も多い（写真 21）。

カウンターに向かって左奥にはこどもの部屋（SPAZIO BAMBI）が設けられている。この部屋は、カウンセリングにも使われている。また、地域のラジオチャンネルもここから放送している。

カフェでは、木曜日の午後は無料で必要な情報を提供するプログラムを行っている。それらは、街での仕事にも関わるような有用な話である。仕事を探している人が相談に来ることもある。これは、アンニョリ氏のインタビューにあった、「職安が図書館にあれば、人目を気にせず気軽に相談に行きやすい」という発想を、地区の家でも行っている取り組みである（→P.51）。実際に、市役所のオフィスだと仕組みや対応が固いが、ここでは市民に近い人たちが話を聞いてくれるため、入りやすく、もらったアドバイスも受け入れやすい。このため、市民にとってはよい相談窓口として機能している。

なお、青少年へのカウンセリングや法的なアドバイスについては、専門的な知識も必要になるため、アポを取ってきてもらう。それ以外は、いつふらっと来てくれてもよく、ここが最初の窓口の役割を果たす。そもそもここにくるのは、高いカウンセリング費用が必要になるような、他の手段にアプローチできない人々である。市役所



写真 23 こどもスペース

左：カフェ側からみたこどもスペースの入り口。

上：こどもスペースの中。低めの天井まで全面的にマリオ氏オリジナルのキャラクターなどの特徴あるペインティングで飾られており、絵本やおもちゃが置かれている。

の相談窓口も行きにくく、行っても支援に繋がってもらうまでに時間がかかる。こういった、その必要がある人たちに対して、相談に行ける先を提供している。ここに来てくれば、お金がかからずに支援を得られる先につながることができる。

②製パン・製菓子工場 Panacea Social Farm

もともとと同様の事業者に貸していたが、いまは直営で営業している。

ここでは、移民を対象とした職業訓練の機会としての事業も行っている。作業を教え、技術の訓練をしながらパンや菓子を作っている。現在の市中のパン屋では一般的に、よく膨らむグルタミンを加えてパンを作っているが、ここでは健康と昔ながらの味をコンセプトに、1950年代まで普通に行われていた、添加剤や改良剤を加えない昔からのレシピと方法でパンを作っている。基本のパンに使われているのは小麦粉、水、塩のみで、小麦粉は未精製のものに限り、穀物の栄養が損なわれずGI値が低いので健康に良い。都市近郊には、昔のパンを知る高齢者が住んでおり、こうした人々にとっては懐かしいなじみのあるパンでもある。また、グルテンフリーのビスケットのレシピも研究している。

窯の温度を有効活用するため、午前中は温度が低くて良いお菓子、午後はクラッカーなどを焼き、夜にパンを焼く。だんだん窯の温度を上げ、最後には260度まで上げて、ピザを焼く。この工場ではパンや菓子を焼いて、カフェで販売をしている。トリノ市内にも、4か所の店舗を持っている。それ以外に、街中で売りたい／提供したいという店舗に出荷している。ここで作っているパンは何日も持つタイプのパンで、それを売りにしている。工場でも、なるべく無駄が出ないように一部はパン粉にしてもう一度使う。

③工房 Carpenteria Soffice

アレッサンドロ・リヴォワール Alessandro Rivoir 氏の工房（写真26）。もともと、氏はボッコ教授と32年来の旧知の仲で、まだ地区の家の活動を始める前に、「専門家」が気に入るような洗練されたグラフィックデザインではなく、人々の心を打つ絵が欲しいと考え、それには氏の作風がぴったりであったので、地域再生のプロジェ



写真 24 製パン・製菓子工場でのインタビュー



写真 25 製パン・製菓子の様子

移民をスタッフとして雇い、職業訓練を行っている。ここで技術や、就労についての基本的な習慣等を身につけて、市中での一般就労に移行する。



写真 26 アーティストが構える工房



写真 27 敷地内に多数配置されたアート

敷地内には、リヴォワール氏の手になる様々なアートが配置されている。

- 1：バーの看板。他の機能についても同様にアート看板がつくられている。
- 2：カフェレストランの窓辺に下げられたアート。
- 3：水道管をカマキリに見立てて塗装したアート。どこを見てもなにがしかのアートが目に入る。
- 4：掲示板の役割を果たしているメッセージツリー。
- 5：各機能の位置を示す、中庭に置かれたサイン。

クトへの参加を依頼していた。地区の家を、よりフレンドリーな場所にするために、アーティストとして様々な絵を入れたり、オブジェをつくったりしてくれている。ちょうどそれまで構えていた工房を使えなくなり、新しい場所を探しているところで声をかけられ、この地区の家の改修作業と、その後の施設メンテナンスに参加してくれたら無償でこの工房を提供するという条件で、地区の家の活動に参加するようになった。

リヴォワール氏は、元々は、イラストを描いたりオブジェをつくったりするアーティストで、家具製作はしておらず、自宅のベッドを作るなど自分の身の回りの家具を製作したことがある程度だった。ここで工房を構えていると、氏のイラストやアートを知らない人々が来て、家具の製作や修理を頼んでくるということがあった。そこで、家具の修理を引き受け、細々した木工の修理の仕事をもらうようになり、いまや「まちの**人気家具職人**」である。水曜日にはDIYのワークショップを行っている。工房で彼がつくった作品は、**マーケットにも色々と展示**されており、大小様々なオブジェが販売されている。**(ボッコ教授) 地区の家をどう作るか聞かれるが、結局のところ、人間が一番大事。**地区の家の活動を実際に担い、支える人がいないと地区の家は成り立たない。

④レンタルルーム Acquario

様々な活動のために貸しているレンタルルーム（写真28）。室名のAcquarioは水族館の意味で、この部屋ではプロジェクターを使ったビデオの映写などができる。**普段は、あまり大きく動き回らなくて良い活動のための場所として使われている。**例えば、ヨガやダンス、ピラティスなどの運動や、ワークショップ、会議、小さな上映会などの活動に使用される。また、**ウィークエンドにはこどもの誕生会や卒業パーティ、洗礼式、婚約会などの小さなパーティ**などである。

また、**週に3回は地区改善プロジェクト AxTO（後述）のオフィスとして利用されている。**

⑤ホール Salone

200㎡ほどの広さのスペースで、動的活動を含む様々な活動に利用することができる（写真29）。天井からアコーディオンの幕を垂らすことができ、空間を仕切って

使うこともできる。この機構は、自転車を解体した部品でつくられている（写真30）。

⑥音楽教室 Jazz School Torino

地下室を利用して設置された音楽教室。各室にそれぞれ楽器が据えられ、楽器別に練習ができる（写真31）。トリノにはジャズを含む音楽文化が根付いており、著名なジャズ・ミュージシャンも数多く輩出している。こうした文化を背景にしたJSTは、ジャズの普及を目的として社会振興協会（Associazione di promozione sociale (APS)）の枠組みで活動している。専業ミュージシャンとアマチュア、愛好家がともに参加し、ジャズ、ブルース、ソウル、ポップと多彩な音楽を学ぶためのコースやセミナーを行っている。対象者は本当の初心者から上級者まで幅広く設定されている。

またこの場所は、ジャズレッスンの場所としてだけでなく、合唱団のリハーサルやバンドの練習、スタジオセッションやパーティの会場としても部屋を貸している。協会は、この活動を革新的な文化的・社会的実験と捉えており、立場を超えて混じり合う社会活動を通じた、音楽という文化の醸成が実践されている。



写真28 レンタルルーム Acquario

ちょうど、地区改善事業のプロジェクトメンバーが打ち合わせに使っていた。



写真29 ホール

広い活動スペースで、いろいろな使われ方に対応できる。

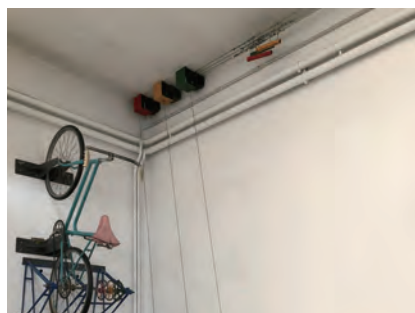


写真30 ホールの機構

解体された自転車の部品を使って滑車を天井と壁面に設置している。チェーンを引っ張るとアコーディオンの幕が上下する仕組み。

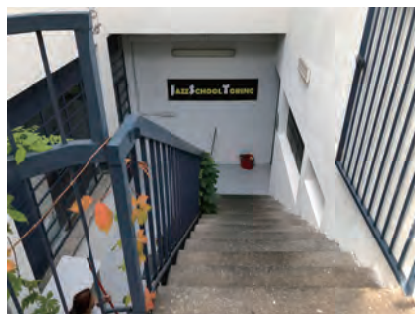


写真31 地下室を利用してつくられた音楽教室

小さい部屋が、それぞれ種類の異なる楽器を練習できるようにセッティングされている。

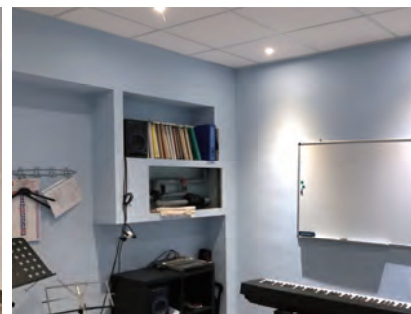
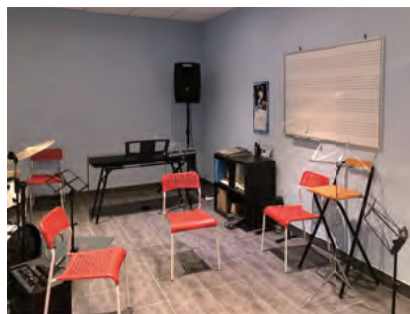




写真 32 共同利用キッチン

本格的な設備を使うことができる。

⑦共同キッチン Kitchen Club

家庭にあるような使い勝手の良い調理設備から、本格的なガスオーブンやベーカリーマシン、フライヤー等の調理設備を使うことができるシェアキッチン。調理教室を開いたり、友人同士で趣味活動としての調理をしたり、ディナーパーティやチャリティ活動などのための調理活動など、プライベートからソーシャルな活動まで幅広く利用されている。皿やグラス、カトラリなども用意されており、ここで作った料理を隣接するホールに並べてパーティを開くなどのイベント的な利用も可能である。



写真 33 植栽が置かれ、テントが張られた中庭

上：カフェ入り口から中庭を見る。

中：中庭中央のテント越しに、工房前に溜まる人々。

下：中庭から道路方向を見る。

⑧テラス

道路から大きな門扉越しに続く中庭。搬出入に使われていたためか街路に対して広く構えられた空間が、地域にとっての心地よい溜まりの空間になっている。中央にはテントが置かれ、植栽の鉢植えがいくつも置かれて「抛り所」を感じられる設えである。植栽には、実のなる樹を選んで入れているとのこと、時期には収穫を楽しむことができる。また、そこここにリヴォワール氏が作成した、味のあるアート・オブジェ兼サインが置かれ、親しみや楽しみのある雰囲気を作り出している（写真 33, 34）。

カフェで買ったコーヒーを中庭で飲む、ふらりと立ち寄っておしゃべりを楽しむなどの様々な滞在が期待されている。地域の人々を主な対象としたイベントの会場に



写真 34 テラスに置かれたテーブル

テラスのテーブルは、高さや大きさも様々なものが置かれている。リヴォワール氏による、数字を組み込んだアートペインティングが施されたテーブルもあり、それぞれの特徴を持っている。

もなる。ホールスペースなど、各室との関係を取りやすい空間配置であり、それぞれのスペースでの活動をつなぐ空間ともなっている。

4. ヴィア・バルテアを拠点にした地域改善活動

AxTO（トリノ郊外でのアクション）という団体が、トリノ市によって結成され、大臣評議会の議長の共同出資により、地域のケアと維持、再生を目的として活動している。この活動は、パブリックスペース、住宅、仕事と商業、学校と文化、コミュニティの参加の5つの軸の合計44のアクションで構成されている。これらのアクションは、例えばうまく使われていない**子どもの遊び場**の改善とプロモーションや**住宅問題**、**就労支援**、社会的なイノベーションに関わる仕事（Open INCET）や放課後学校、文化的なプロジェクトなど多岐に渡る。

これらのトリノ市内での様々な地域改善活動が、地図



写真 35 マップを見ながらお話を伺う

レンタルルームを利用して、週に3回のオフィスアワーを持っている。この時間には、参加スタッフが集まってそれぞれのプロジェクトの進捗の報告や、相談を行う。この活動の際には、マップやプロジェクト一覧の掲示が部屋に出されて、様々な課題や話題の共有が可視化されている。

4) AxTO,<<https://www.axto.it/>>

5) プロジェクト一覧、<http://www.comune.torino.it/axto_periferie/progetto_axto/index.shtml>

6) <https://openincet.it/>



写真 36 トリノ市内での活動内容のマップと凡例

軸1 パブリックスペース	
	学校の機能回復と安全性
	学校でのアスベスト、人工硝子体繊維の再生利用
	学校へのアクセスの確保
	道路・歩道の臨時整備
	ドーラ公園の完成と残置スペースの再開発
	地区市場アーケードの特別整備
	ルッフィーニ公園体育館の特別整備
	ルッフィーニ公園のベースプラントの特別整備
	市営プールの臨時整備
	個人向けサービスのための施設の特別整備
	子どもの遊び場のリニューアルと樹木の整備
	ベラ・ローザンの霊廟の修復
	バイクシェアリングサービスの拡充

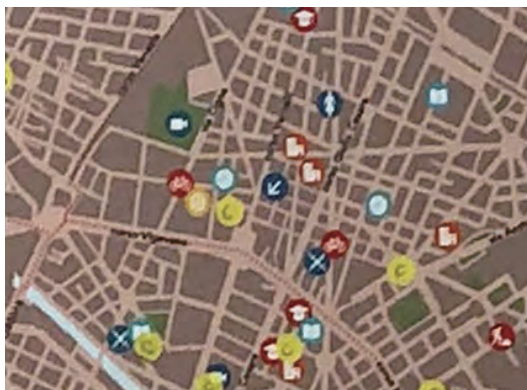


写真 37 ヴィア・バルテア付近の拡大図

紺色の矢印マークの箇所がヴィア・バルテア。例えばその右上に2カ所の住宅プロジェクト、女性保護センター、等のプロジェクトの展開を読み取ることができる。

軸2 住宅	
ERP 住宅ユニットでのシステム確保	
新しい ERP の宿泊施設	
軸3 仕事とイノベーション	
Open INCET (オープンイノベーションセンター)	
トリノワークセンター	
PQU - 商業資格プログラム	
軸4 学校と文化	
校庭の開放	
社会的包摂のための教育サービスの強化	
アイアンバレー	
軸5 コミュニティと参加	
技術支援・社会支援 AxTO プロジェクト	
近隣の住宅とプロジェクト The Gate Porta Palazzo	
ファミリーセンター Mirafiori Nord - 宿泊施設 4	
Mai più sole (もう 1 人じゃない): 女性への暴力に共に立ち向かう	
Informagiovani (若者向けの情報)	
カメラ: 統合されたビデオ監視システム	

上にマッピングされている (写真 36)。この図のうち、茶色で塗られている地域は、**なにかしらの問題がある地域**である。このマップは、**街の人たちにこんなプロジェクトがある (特に北側のプロジェクト)**と伝えるためのもので、**街に出て行き各地でそれぞれの場所での活動内容**を伝えている。

活動内容は、道路、学校、庭園、家屋の維持管理を伴う物質的レベルとともに、様々な市民団体が関わり、それらの団体をつなぐ組織づくりなどソフト (非物質) 面での多様な活動に及ぶ。プロジェクトは 2017 年から 2020 年初旬までの予定であった。

業務の枠組みは、1,800 万 € の政府拠出金と 2,700 万 € の市と県による拠出金をトリノ市がとりまとめ、市の直接業務と外部委託業務に振り分けるというものである。この外務委託業務はコンペで募集されたため、スミズーラを含む 3 つの団体 (教育や移民の受け入れ、放課後学校などを行っている団体) で応募し、トリノ市北側エリアの業務を請け負うことになった。南側エリアは別の団体が担当している。

こうした社会的事業でも、**新しく建物を建てること**まず計画されない。既存の建物を活かして、まちを再生するということが基本的なスタンスである。

多様な業務が、そのときどきの行政ニーズに即して生じること、またまちのニーズを業務化し、時には行政からの支援を得られる事業として組み立てるという輻輳した方向をもつ組織運営や業務内容の様子をうかがうことができた。



写真 37 食事をいただきながら活動についてのお話を伺う